

TOKYOから東京へ ～オリンピック報道に見る「国家主義的」まなざしの変質～(前)

A Study of Olympic coverage by the graph magazine

梅 津 顕 一 郎

本研究は、オリンピックのような巨大メディアイベントが果たしうる(または果たしてきた)社会システム上の役割に関する考察である。第31回夏季オリンピック東京大会まで3年を切った今日、我々は1964年の大会に関する言説を数多く見かけるようになってきているが、その多くは、かつての大会が象徴した当時の我が国における発展的状况と、未来への希望を我々に思い出させようとする傾向にある。それは、1964年に行われた18回大会およびその時代と、31回が開催される2020年とを、時代をまたぎ架橋することで、現在を生きる我々にも64年大会当時の「希望にあふれた」先人たち同様の活力と団結力を与えようとするものであるように思われる。しかし世界的にハイモダニティ化が進展しつつある現在、この発想自体果たして有効なものであるといえるのか。本稿ではとりわけオリンピックのイデオロギー装置としての役割に着目し、大会報道(大手新聞社発行グラフ誌)に見る国家的イベントへの「まなざし」の変質から検討を進めた。なお今回の論文はあくまで試論的な役割を担うものであり、今回の議論も筆者が現在行っている研究の一端に過ぎず、来年度以降も続編を執筆する予定である。

キーワード：3つの東京オリンピック、グラフ誌、まなざし、イデオロギー装置としてのオリンピック、(ポスト)総力戦体制、国民国家の終わり

目 次

- I はじめに
- II 分析の対象と方法
- III グラフ誌に見る1964年第18回東京大会へのまなざし
- IV オリンピックへの国家主義的まなざしの変質
- V 結語に変えて～消費される「仲間」が紡ぐ、新たなる「国民国家」幻想～

I はじめに

(1)問題の所在

本研究は、オリンピックのような巨大メディアイベントが果たしうる（または果たしてきた）イデオロギー装置としての今日的役割と、その変質に関する考察である。

第31回夏季オリンピック東京大会まで3年を切った今日、我々は二つの「東京オリンピック」に関わる言説を、社会生活の様々な局面において目にするようになってきている。言うまでもなくそれは、2020年に開催が予定されている未来の「東京オリンピック」と、かつて開催された1964年の「東京オリンピック」である。

その中でも特に1964年の大会に関する言説の多くは、かつての大会が象徴した当時の我が国における発展的状況と、未来への希望を我々に思い出させようとする傾向があると言ってよいであろう。それは、単に20世紀もしくは昭和ノスタルジーを喚起するのではなく、換言すれば1964年に行われた18回大会およびその時代と31回が開催される2020年とを、時代をまたぎ架橋することで、現在を生きる我々にも64年大会当時の「希望にあふれた」先人たち同様の活力と団結力を与えようとするものであるように思われる。そしてそこには「国民国家」の正当性をめぐる、優れたイデオロギー装置としてのオリンピックへの着眼を見て取ることができる。¹

一方現代と1964年当時とを比べてみると、JOCやオリンピック・ムーブメント自体はもちろん、広くスポーツ界全体にわたり、状況は激変している。もちろん1964年当時、オリンピックは既に国際的に広く認知されたスポーツイベントではあった。とは言え、第18回大会の参加国数は90余、選手数も5000人台半ばである。実施種目は164（20競技）にすぎず、200以上の国と地域から1万人を優に超える選手たちが参加し、306種目28競技（2016年リオデジャネイロ大会の数値）にわたって戦いをくり広げる現在の大会と比べれば、半分以下の規模にすぎない。さらに言えば、当時、参加は全てアマチュアに限られておりプロも含めたスポーツ界全体におけるオリンピックの求心の力は、今よりもずっと小さかったことが推察される。

その上で、オリンピックとスポーツを取り巻く時代状況、社会意識の面に目を向けてみれば、言うまでもなく、こちらも激変と言わざるをえない。高度成長の真ただ中にあり、政治的には国際社会における「東西冷戦」と国内における保革対立がパラレルに進行した64年当時、良かれ悪しかれ社会意識の地図は「安定構造」にあった。一方所謂55年体制の崩壊が指摘され久しいにもかかわらず、未だ安定した構図は見えてこないのが、現代を生きる我々の意識地図の実状である。こうした過去と現代との違いを超えて無理やり同じ土俵に乗せる発想自体、乱暴と言わざるを得ないであろう。

にもかかわらず1964年的なものへの回帰という、少なからず陳腐なアイディアが正当性をもちうるという現実、時代史的にいかなる意味あいを持っているのか。そのことを考えるために、当時のオリンピックへのまなざし、今日との差異、およびその時系列的变化を読み取るのが本稿

の課題である。

(2) 今回の論文について

そこで本論文が目論むのは、1964年当時に発行された報道出版物とその後のそれを比較検討することで、1964年当時のオリンピックへのまなざしその後どのように変化していったか把握することである。検討にあたり資料としたいのは、各オリンピック特集を組んだ「グラフ誌」増刊号による報道内容である。「グラフ誌」とは、近年まで大手新聞が発行していた写真誌のことであり、その内容は数々の歴史的な報道や、その時代に代表される世相や風俗の特集記事などであり、一般にはそれぞれの時代史を研究する上で資料的価値も高いとされている。

議論のポイントは以下の三点である。①1964年当時の第18回「東京オリンピック」へのまなざしはいかなるものか。②そしてそれは今日との比較において、いかなる意あいを持つものなのか。③19回（メキシコシティ大会）以降30回（リオデジャネイロ大会）までのオリンピックへのまなざしの時系列的変化と、その背後に見えるものは何か。

これらを考えるために、本稿では筆者が行ってきた分析のうち、主としてビジュアル面に着目し、表紙と大会ハイライト、全体の記事構成を中心に言及する。なお、今回は誌面の関係もあり、分析の全てを紹介するものではないことをあらかじめお断りしておく。

II 分析の対象と方法

(1) グラフ誌のメディア的特性について

議論を進めるにあたり、分析対象をグラフ誌としたことの狙いを明確にするために、ここでメディアとしてのグラフ誌の性格付けについてやや詳細に述べておきたい。

我が国において大手新聞社発行の「グラフ誌」が登場する時期には、かなりの幅がある。また、残念ながらグラフ誌のすべてが今日では歴史的使命を終え廃刊となっている。先駆けとなった「アサヒグラフ」は、朝日新聞社が1923年より刊行をはじめたもので（同年11月14日号より週刊化）、2000年10月15日をもって休刊となっている。一方、「毎日グラフ」は毎日新聞社が1948年に刊行をはじめたもので、1990年代にレギュラーでの発行は終了となり現在は廃刊されている。その他、「読売グラフ」「サンケイグラフ」についても比較的早く刊行が終了している。

ところで、社会的・文化的な時事的出来事を取り扱う刊行物や著作物、あるいは放送番組といったメディアコンテンツが、刊行（あるいは放送）当時の「集合的記憶」を表象するものであるという議論には一定の信頼を置くことができるが、それが即時的なものなのか、時間をかけ再構成されたものなのかについては、それぞれのメディアとしての特性、あるいは編集方針によって異なると考えるのが妥当であろう。

「即時性」に優れている場合、その場で見えるものをその場にいる感覚に比較的近いレベルで表現することとなるが、言語にせよ、画像、映像、音声にせよ、反芻的な思考を経て意味を紡ぐあるいは物語を再編する機会は小さくなり、「物語性」は相対的に弱くなる。逆に物語性に優れる場合、その場での感覚を直接的に反映することは難しくなるが、反芻的な思考（特に言語）を介する時間は増えるため、物語としての姿（輪郭と中核）を表現するという点では優れていると見ることができよう。無論これらの議論はあくまで「相対的」なレベルのものであり、実際には制作担当者の持つ「作家性」やメディア各社の基本方針等によって左右されることも大きいこと、さらにはメディア報道自体の疑似性・虚構性の問題については留意する必要がある。

さて、その点も踏まえたくえで敢えて「グラフ誌」の位置づけをするのであれば、それは次のようになるであろう。

週刊で発行されるグラフ誌の場合、「即時性」と言う点では、テレビ中継（リアルタイム、またはそれほど時間を置かない再放送）や、新聞報道（翌日発行）には劣るものの、後日改めて編集されるTVの特集番組（ドキュメンタリーなど）や記録映画、出版刊行物よりは優れていると見ることができる。オリンピック特集のグラフ誌の場合、週刊の報道を取りまとめ、再編の上で増刊されるので、ある意味後日編集されるメディアと近い点もあるが、内容が週刊で出したものの延長にあるという点では、週刊誌に近いと見こともできよう。逆に「物語性と言う点ではTVの特集番組、記録映画・出版刊行物には劣るものの、週まとめで作られた内容を反映させるという意味では、テレビ（中継）や新聞（翌日）よりも優れているということになる。

すなわち「即時性」、「物語性」どちらも中間的な「グラフ」誌においては、その場で「読み取られたもの」、時間をおいてまとめ上げられ、物語化したもの双方をその内容に含み持つ可能性がある。換言すれば、その時代を一定の立ち位置から俯瞰的にとらえる要素を持ちつつ、比較的即時的な捉え方を反映していると言えよう。

(2)分析の対象について

今回は、「アサヒグラフ」、「毎日グラフ」両誌における各オリンピック特集増刊号をとりあげる。両誌はその第一号刊行の時期こそ違うものの、同時期からオリンピック特集の増刊号を発行しはじめ、今日においてもなお後継誌へと引き継ぎながら、同じ形式を踏襲しているメディアである。

大手新聞社発行によるグラフ誌の登場と退場については前章で述べたとおりだが、オリンピックの報道に関しては、1923年創刊の「アサヒグラフ」に於いては第9回アムステルダム大会から、戦後創刊の「毎日グラフ」については第14回ロンドン大会から報道している。ただし両誌とも当初は増刊号、特集号等を組んではおらず、あくまで通常発行のグラフの中で一般の話題と併せて特集記事を組むにすぎなかった。

オリンピックに関する報道記事を中心とした、所謂増刊号が発行されるのは、両誌ともに第17回ローマ大会(1960年)以降である。以後、両誌とも2016年のリオデジャネイロ大会まで、後

TOKYO から東京へ～オリンピック報道に見る「国家主義的」まなざしの変質～(前)(梅津顕一郎)

雑誌も含め特集号(増刊号)を発行している。うち「アサヒグラフ」は2004年のアテネ大会からまた「毎日グラフ」は1996年のアトランタ大会よりそれぞれ「週刊朝日」、「サンデー毎日」の増刊号に引き継がれている²。

以上の事情を踏まえ、今回はローマ大会以降発行された「アサヒグラフ」、および「毎日グラフ」の夏季大会の特集増刊号全て(引き継ぎ後は「週刊朝日」「サンデー毎日」)を分析対象とし、その他3つの冬季大会や一般号における特集記事、さらには写真集等を参考資料とする。

(3)研究の方法について

最後に研究の方法について述べておきたい。今回対象とするグラフ誌は、あくまで写真記事が中心のものであり、文章表記による記事は補助的な役割となっている。従ってテキスト情報に関しては量的にも少なく、所謂数量的な分析は、必ずしも効果的ではないと考えられる。そこでグラフ自体が物語る「まなざし」の変化を質的にとらえるために、マスメディア研究等で行なわれている一般的な方法により分析するという手法はいったん断念し、①表紙、②全体の記事の構成割合やカラー/白黒の割合、および紙質、③各写真記事の対象、構図等について、それぞれいくつもの指標を設けることで、分析的に解釈を施すことを試みたい。

III グラフ誌に見る1964年第18回東京大会へのまなざし

(1)「特別な大会」としての東京オリンピック

はじめに東京大会を報道した両誌の特徴について、近年の大会におけるそれとの比較から明らかにすることで、同大会が大会直後の時期においてどのようにまなざされていたのかについて検討したい。

まずは両誌の構成、ページ数から見てみよう。目を引くのは、そのボリュームの大きさである。広告ページも含め、アサヒグラフは総ページ数226、毎日グラフは170である。これは前後の大会、あるいは今日の大会と比べても圧倒的に多い。例えば前後する大会のアサヒグラフが第17回ローマ大会時58(毎日も58)、第19回メキシコ大会時130(毎日は下記事情から実質89ページ)であることと比べてみても明らかであろう。

なお、東京大会では両誌とも内容は完全にオリンピック報道に徹している。今日では当たり前だが、実は東京大会の4年後に開催されたメキシコ大会では毎日グラフのみ、一部オリンピックとは関係しない一般の話題(新宿騒乱事件など)も取り上げており、その意味では東京大会が、いかに関心の高い大会であったかがわかるであろう。

また、大会への関心の高さ、大きさを示す点で筆者がもう一点指摘すべきであると考えるのは、「毎日グラフ」における紙質である。同誌の東京大会特集号には、全ページにわたり半光沢タイプ

の紙が使用されている。今ではごく当たり前となった光沢紙の使用ではあるが、両誌のローマ大会特集号や、「アサヒグラフ」の東京オリンピック特集号、さらには次のメキシコオリンピックを特集した両誌のいずれにおいても質の劣る非光沢タイプの紙を使用していること、オリンピック特集増刊号において光沢タイプの上が使用されるのは、両誌とも1972年の札幌大会号からであること³、その前後の時期に発行されたオリンピック以外の出来事を特集した増刊号では、68年の明治100年を特集した毎日グラフが光沢、非光沢紙の併用（ただし圧倒的に非光沢紙ページが多い）、69年のアポロ11号の月着陸と70年の日本万国博覧会（大阪万博）を特集した毎日グラフ、アサヒグラフがそれぞれ光沢タイプをすべて使用したつくりとなっていたことを考えた場合、「毎日グラフ」のみであるにせよ1964年の段階で光沢タイプをすべてのページに使用したグラフを発行したこと自体、東京オリンピックが、記録すべき特別な大会として受け止められていたことをうかがい知ることができよう。

(2)アサヒグラフ「大会ハイライト」に見る東京大会の捉え方

①大会ハイライトに登場しない日本人選手たち

では、そうした「特別な」まなざしは、オリンピック大会のどの要素にどのように向けられたのであろうか。次に大会ハイライト・名場面集に関する記事の内容を通して検討してみよう。

大会の名シーン、ハイライトを綴ったカラーグラフ記事は、東京大会特集のアサヒグラフにおいて初めて組まれている（タイトルは「世界の美と力」）。毎日グラフにおいてはそのような記事は特に組まれていないが、アサヒに関してはその後、断続的に掲載していることが確認できる。さらに88年ソウル大会からは実質上連続して掲載されている。

東京大会の増刊号におけるハイライトシーンの掲載内容についてみると、ほぼ外国人選手の活躍で占められている点が大きな特徴である。陸上男子100m走のボブ・ヘイズ（米）、200mのカー（米）、水泳4冠王のショランダー（米）、体操女王のチャフラフスカ（チェコスロバキア）など、世界の名だたるスター選手の活躍が続き、日本選手は唯一、マラソンで3位に入賞した円谷選手のみが登場している。それも表彰式で一位のアベベ、二位のヒートリーとともに表彰台上がっている写真一点のみの登場であり、このカットが見開きで並ぶアベベ選手のゴールシーンのカットと一対をなしている構成からも、主役はあくまで優勝したアベベ選手であり、3位の円谷選手は2位のヒートリー選手（英）とともにあくまでわき役的な役割に置かれているに過ぎないことは明らかである。

この大会で、日本のナショナルチームは合計16個の金メダルを獲得している。オリンピックの実施種目数が現在よりも少なかった同大会において、この数字はアメリカ、ソビエトに続き第3位に相当するものであった。また、東京大会以前、日本チームの金メダル獲得数はいずれも一ヶ台にとどまっておき、特に戦後は増加した種目数に対するメダル数の少なさ、陸上、水泳といった「メイン種目」の不振が指摘されていた。従って金メダル16は、当時としては驚異的な

数字であり、国民に強いインパクトで受け止められていたことは間違いない。つまり同大会は、日本人選手の活躍が「東洋の魔女」「男子体操チームの活躍」といった物語によってだけでなく、単純に日本選手団の競技成績という数的なレベルにおいても話題をさらった大会であったはずである。

このように考えたとき、大会を彩る名場面集に日本人選手がほとんど登場しないことは、むしろバランス上ある種の不自然ささえ伴うものであり、この大会へのまなざしが、何らかの意図のもとで日本チームの活躍以外に向けられていたことを物語る。

②「世界が日本にやってきた」という物語

同様の傾向は、開会式の様子を伝える記事の構成にも表れる。別表にあげた東京大会における両誌の記事を鳥瞰すると、日本チーム以上に世界各国のチームに広く関心が払われていることが理解できる。例えばリオデジャネイロ（2016）、ロンドン（2012）両大会においては殆ど掲載されなくなった各国選手団の入場シーンに、両誌ともかなりのスペースを割いている。特に毎日グラフはのべ9ページにわたり、巻頭に登場する日本チームも含めると実に63チームもの選手団の様子を取り上げており、これは全参加国数の約67%に相当する。

さらに言えば、今日では殆ど掲載されていない選手村における選手たちの交流に関する記事も、東京大会特集号では少なくないページ数で報じており、そこでは大会期間中の細かいエピソードなどが拾い集められ、世界の若者が16日間共に過ごす選手村ならではの友好的な雰囲気が表現されている。⁴

③「国を挙げてのオリンピック」という物語

一方世界を迎え入れる、開催都市東京に対するまなざしは如何なるものであろうか。ここで注目したいのは、両誌ともに大会準備や開催都市東京の街の様子に関する記事を取り上げている点である（この項目は近年のグラフ誌にはない）。例えば、アサヒグラフにおいては、「Tokyo ファンタジー」のタイトルでオリンピック期間中、国際都市と化した東京の様子を、やや散文的なニュアンスでとり上げており（4P）、一方毎日グラフにおいては「国力を示した競技場」と題し、4ページを割いて競技施設に関する記事が組まれている。⁵

さらに言えば、毎日グラフでは「太陽の火」なるタイトルで、オリンピアでの裁火式にはじまり、開会式当日までの国内におけるリレーの名場面などを取り上げた記事を9ページにわたり掲載している。アサヒグラフには見当たらないものの、写真集レベルは同様の記事が組まれるケースが多い。これは東京の出来事とは無関係な「分立する地域」が退却し、東京で行われるオリンピックのために連帯して協力する「国家のための地域」がこの時代には成立していたことを物語り、前出の施設整備とともに、大会のために国を挙げて準備に取り組んだ様子を伝えるものであると解釈できよう。

言うまでもなくこの大会が、アジア太平洋戦争の敗戦国である日本が戦後平和国家・経済大国となり、国際的に再デビューするための格好の舞台となったことは、今日まで多くの指摘を見るところである。大会前、国民世論は後の人々の理解以上にドライであったとの指摘もあるが、少なくとも大会後の国内の高揚ぶりは、これらの記事の中に充分確認することができよう。そして、このような「国を挙げた」盛り上がりこそが新生日本の国民国家としてのまとまり意識を支え、社会意識面から戦後日本の正当性を付与したのである。

④総力戦体制の象徴としての東京オリンピック

ところで1964年の東京オリンピックは、1936年に次期大会開催地としての誘致を成功させながら、日中戦争の勃発により返上に至った、幻の第12回大会のリベンジでもあった。よく知られているように、1940年大会のデザインは、36年にドイツ・ベルリンで開催された第11回大会をモチーフに計画されたものである。当時は世界恐慌後の混乱を乗り越えるために、世界列強がそれぞれ国ぐるみで一体感を増し、国内の各セクションの分業体制を整備していった時代であった。所謂「総力戦体制国家」の誕生である。ベルリン大会がナチス・ドイツの優位性を国の内外にアピールする場となり、ドイツ国民にとって総力戦体制のための格好のイデオロギー装置となったことは、第12回東京大会が、遅ればせながら「総力戦体制国家」の一員となった当時の日本にとって、その優位性を発揚する場となるはずだったことを物語る。

「総力戦体制」とは、山之内靖によれば「階級社会からシステム社会への移行」を本質とする政治・経済・文化的な国家体制のことである。周知のように、総力戦体制以前、人類の歴史はそれぞれの社会、それぞれのコミュニティにおける「強者」と「弱者」の支配と対立、そして覇権争いによって特徴づけられる「階級社会」の枠組みのなかで進んできた。しかし、近代に入り「国民国家」という合理的かつ巨大な分業体制が出現し、やがてシステム社会、すなわち個人間、コミュニティ間、地域間の分業による緊密な関係調整と強固な連帯によって特徴づけられる社会へと変貌した。日本の場合、それは1938年の国家総動員法制定や1940年の大政翼賛会の結成によって、成立したと見ることができる。そして、その最初の国家的大プロジェクトが日中戦争からはじまる、一連のアジア・太平洋戦争であった。⁶

しかし重要な点は、「総力戦体制」とは、決して戦時中に敷かれた挙国一致体制のみを指すのではなく、第2次大戦前から始まり、少なくとも1960年代末まで続いた、中央集権的で分業的な国家単位での社会システムを広く意味しているということである。従ってアジア・太平洋戦争同様、戦後の高度経済成長もまた、「総力戦体制」によって支えられたプロジェクトであった。

話しを1940年のオリンピックにもどそう。総力戦体制は、社会の具体的な仕組みとしての分業と連帯から、それらの仕組みに正当性を付与するような集合意識の面まで、政治、経済、人間関係、消費、娯楽、イベント、メディア報道、学問など、あらゆる人間的活動のシステムのパターンのなかに立ち現われるものである。まさに1940年に断念された東京オリンピックは、こうし

た総力戦システムに組み込まれ、なおかつそのイデオロギー装置として機能するはずのものであった。

しかし実際にはスタジアム問題の躓きに始まり、日中戦争勃発による国際世論での日本不支持の広がり、さらには戦争激化による鉄材の不足によって大会は返上へと追い込まれてしまう。⁷ このことは、当時の総力戦体制がまだまだ未成熟であったことと、それゆえオリンピックのようなイデオロギー装置と産業的・政治的分業体制が両輪として動くレベルには至っていなかったことを示している。そしてそのリベンジである1964年大会はまさに「総力戦体制」のシステムが完成し、見事なまでに稼働した時代のオリンピックだったわけである。

IV オリンピックへの国家主義的まなざしの変質

このように、1964年東京大会の成功は、それが当時絶頂期であった「総力戦体制」の時代に開かれた大会であったことと連動していると思われるべきであろう。そして当然このことは国民から大会へとむけられるまなざしにおいても現れていると筆者は考える。東京オリンピックは国民総ぐるみで動かす「総力戦体制」によって支えられ、また国民に大会への特別なまなざしを育むという相補的な構造によって、大会自体が「総力戦体制」の優れたイデオロギー装置として機能していたのである。

では、東京大会後、後続のオリンピックにおいて、そのまなざしはどう変化していくのか。とりわけ1970年代中ごろ以降の「総力戦体制」の機能不全が指摘されだす時代以降、それはどう変わっていくのであろうか。このことを詳細に検討するために、次に東京大会における「国家主義的」なまなざしが、後続の大会において、どうしていくのかについて、各号の表紙とハイライト記事を手掛かりに把握したい。以下では前章で指摘した東京大会の特殊性をより明確に描き出すことも意図し、1960年のローマ大会も含めアサヒ、毎日両グラフ誌を検討に検討を加えていく。

(1)表紙の変遷が示すもの

①分析の対象と内容のカテゴリー化

はじめに、表紙の変遷についてみてみよう。言うまでもなく表紙は、それぞれの号のコンセプトを主題化したものであり、編集部が各大会の何に注目したかが現れていると考えて良い。各号の表紙の内容は表1の通りとなっている。ここではまずa. 対象:人(a-1)か物、あるいはこと(a-2)か、b. 焦点特定対象の焦点化(b-1)か俯瞰化(b-2)かに分類することで、ローマ大会以降の各号表紙について、それぞれ何を表現しようとするものであるのか、その狙いを解釈した。その結果に基づいて整理し、以下のようにタイプ分けした。

a. 「聖なる祭典オリンピック」型

「聖なる祭典」としてのオリンピックを象徴するシーン、または象徴物を表紙とするケースである。具体的には開会式の全体的な様子を引きの映像や鳥瞰的な映像でとらえたもの、聖火の点火、採火式などオリンピックならではの儀式をとらえたもの、さらには聖火台に炎が燃え上がる様子や、参加各国の国旗が主競技場にはためく様子などに焦点を絞ることで、国際イベントとしての厳粛さや古代オリンピアのスポーツ祭典にひな型を持つことに由来する、大会の神秘性を表現していると考えられる。

b. 「世界の若人のスポーツ祭典」型

世界規模による若人のスポーツ大会としてのオリンピックを象徴するシーンを表紙とするケースである。具体的には競技中の様子を比較的引きの画像で、全体的にとらえることで、実名性のある選手個人に焦点を当てるのではなく、ゲームに参加する複数の選手を匿名的にとらえている。言わば、選手ではなくゲームそのものに主題を置いていると言い換えてもよい。これにより個人（もしくは個別チーム）、あるいは個人間（もしくはチーム間）の物語性ではなく、競技が行われていること自体を表現していると考えられる。

c. 「個別チーム・選手への焦点」型

活躍する選手たちを実名的にとらえ、競技そのものではなく、個人の戦いをテーマとするケースである。個別のチームまたは選手を実名的に撮影することで、競技によって発生した特定の選手もしくはチームをめぐる物語性を表現していると考えられる。なお、ここでは便宜的に競技中を a、競技後（表彰式など）を b としたい（厳密には、ゴール直後の表情など競技直後の余韻をとらえたシーンまでは競技中とする）。また、日本チームをタイプ1、海外チームをタイプ2とする。

②表紙の変遷に見る3つの時代区分とオリンピックへのまなざしの推移

ここで、前述の指標と分類に基づき各大会ごとの表紙の変遷について分析してみよう。全体に、それはおよそ次のような3つの時代区分に分かれると解釈することができる。

a. 多様な視点の時代(1960～1972)

まず、別表1のように、グラフ誌の増刊特集号の刊行が始まった1960年ローマ大会から72年のミュンヘン大会までは、上記3タイプ全てが登場しており、その意味では「多様な視点の時代」であったと言ってよい。ただし、タイプaが1960年ローマ大会、東京大会に限られているのに対して、競技に関わるタイプb、cは60年から72年までまんべんなくみられる点は注目すべきであろう。また、この時期のタイプcは、すべて日本選手を対象としている（ローマ大会の毎日グラフ：田中聡子、メキシコ大会のアサヒグラフ：君原健二、ミュンヘン大会の毎日グラフ：男子

TOKYO から東京へ～オリンピック報道に見る「国家主義的」まなざしの変質～(前)(梅津顕一郎)

バレー日本チーム)。この点にも留意したい。

別表1 多様な視点の時代(1960～1972)

<ul style="list-style-type: none">・「聖なる祭典オリンピック」型:2点 1960アサヒ(開会式における聖火点火)、1964毎日(メインスタジアムの聖火台と炎)・「世界の若人のスポーツ祭典」型:3点 1964アサヒ(陸上1万m走序盤戦の戦い、選手は20人程度) 1968毎日(マラソンスタート。全選手が映り込む)1972アサヒ(陸上3000m障害、水濠を超える一群の選手たち)・「個別チーム・選手への焦点」型 うちa1:3点 1960毎日(水泳女子背泳でメダル獲得した田中聡子)、 1968アサヒ(マラソン、ゴール直後の君原健二)、1972毎日(男子バレーボールチーム) b1:2点 1972冬アサヒ(70m級純ジャンプ、表彰台に立つ3人の日本選手)、 1972冬毎日(70m級純ジャンプ、表彰台に立つ3人の日本選手) <p>※a2、b2ともに0点</p>
--

b.国際的スターの活躍を主題とする時代(1976～1988)

次に、76年のモントリオール大会から88年のソウル大会までは、国際的スター選手の活躍を主題とした時代であるということが出来る。別表2のように、かつてのタイプaは姿を消し、タイプbが1点、タイプcが5点となる。ただし、男子100mのゴールシーンを横からの引きの画像でとらえている76年モントリオール大会のアサヒグラフについては、競技全体の様子を鳥瞰的に捉えているという解釈も成立するが、1位のクロフォード(トリニダードトバコ)と2位のクォーリー(ジャマイカ)がソ連、アメリカの強豪を抑えているシーンとして読み取ることも可能である。100m2位のクォーリー選手は200mの金メダリストであり、この大会の男子陸上では400mと800mの2冠王となったキューバのファントレナ選手も含めた彼ら3人の活躍は、「カリブ海旋風」として大きな話題となった。その意味ではこの表紙はタイプcに近いコンセプトであると解釈することも出来る。

なお参考までに、1980年モスクワ大会に関しては日本チームのボイコットのおおりに受け、大手新聞社発行のグラフ誌増刊号は発行されていない。ただし、通常発行号では特集記事を組んでおり、この時のアサヒグラフの表紙はタイプcのa2(女子体操のシャボジュニコワ(ソ連)の平均台の演技)となっている。

また、84年のロサンゼルス大会ではいずれも陸上4冠王カールルイスが、88年のソウル大会では女子短距離3冠王のフローレンス・ジョイナーが、いずれの2誌ともに表紙を飾っており、大会の主役であることが示されている。

別表2 国際的スターの活躍を主題とする時代（1976～1988）

- ・「聖なる祭典オリンピック」型:0点
 - ・「世界の若人のスポーツ祭典」型:1点
 - 1976アサヒ（陸上男子100m、ゴールシーン）
 - ・「個別チーム・選手への焦点」型
 - a2:5点 1976毎日(女子体操ナディアコマネチ)、1984アサヒ(陸上男子カールルイス)、1984毎日(陸上男子カールルイス)、1988アサヒ(陸上女子フローレンスジョイナー)、1988毎日(陸上女子フローレンスジョイナー)
- ※a1:0点、b1:0点b2: 0点

c.日本選手の活躍を主題とする時代（1992～）

最後に1992年バルセロナ大会以降、2016年のリオデジャネイロ大会までは、徹底してCタイプ、それも日本選手に焦点を当てたものとなっている。ここで特徴的なことは、取り上げる対象が必ずしも金メダリストとは限らないこと、2大会連続で同一アスリートを取り上げるケースが増えること（特に北京以降）、大会によっては2誌とも同じアスリートを、ほぼ同じアングルからとらえるケースも出始めた点であろう。

金メダリスト以外の選手が対象となる点については、後段で詳述するが、ここでは同一アスリートの連続採用や同一アングルによる写真の採用について述べておきたい。

同一アスリートの採用は、2004年のアテネ大会と2008年北京大会における北島康介の例がある。当時北島選手は圧倒的な実力で世界に君臨し、男子平泳ぎ100m、200m双方で連覇を果たすなど、日本人選手でありながらも世界的なスターアスリートの脈絡に連なる選手であった。2012年と2016年の内村航平選手についても同様のことが指摘できるだろう。しかし、ここで指摘したいのは、このような時代にあってもなお2012年の毎日グラフのように、金メダリスト以外の選手が採用されている点である。ここで取り上げられた卓球女子団体の3選手は、当時そのチームワークの良さや信頼関係の高さが評判を生み、いわば仲間としての絆を象徴する選手たちであった。また、表紙こそ体操の内村選手にとってかわられたもののロンドンでは北島康介選手に対する後輩たちの尊敬と思いやりが報じられるなど、2010年代以降の大会報道では特に仲間とのつながりが隠れたテーマとなっているようにも見える。

一方北島選手、内村選手においては、ほぼ同じアングルからの写真が2誌それぞれに採用されているケースも目立つ。このことは近年の傾向として、ある意味スターアスリートそのものの魅力を探るというよりも、感動的なシーンやスターのしぐさを紋切り型の定型にはめることにより、読者に対してオリンピックをある種消費的に楽しませることの表れであるようにも読み取ることができる。

別表3 日本選手の活躍を主題とする時代 (1992～)

- ・「聖なる祭典オリンピック」型:0点
 - ・「世界の若人のスポーツ祭典」型:0点
 - ・「個別チーム・選手への焦点」型
 - a1:点 1992アサヒ(水泳岩崎恭子)、1992毎日(水泳岩崎恭子)、1996アサヒ(マラソン有森裕子)、1996毎日(マラソン有森裕子)、2000アサヒ(マラソン高橋尚子)、2000毎日(マラソン高橋尚子)、2004アサヒ(水泳北島康介)、2004毎日(水泳北島康介)、2008アサヒ(水泳北島康介)、2008毎日(水泳北島康介)、2012アサヒ(体操内村航平)、a2:0点、b1:3点 (2012毎日、2016アサヒ、2016毎日)
 - 2012毎日(卓球福原愛、石川香住、平野)、2016アサヒ(体操内村航平)、2016毎日(体操内村航平)
- ※b2: 0点

③大会ハイライト・名場面集の変遷から見えるまなざしの変質

次に大会ハイライト・名場面集の変遷についてみてみよう。ここでも目立つのは、世界のスター選手から日本チームへの対象の移行である。

前章で指摘したように、東京大会のアサヒグラフで「名場面集」を占めるのは、外国人のスター選手の活躍ぶりであった。その後メキシコ(1968年)からシドニー(2000年)では、日本選手、外国人選手双方を取り上げる構成となり、徐々に日本選手の占める割合が増してゆく。そしてアテネ以降は日本選手のみを取り上げている。また、日本選手の割合が拡大するのと比例するかのよう、ページ数も毎回増大し(とりわけバルセロナ大会以降)、東京大会当時10ページ程度であったものがロンドン大会(2012)では37ページ(写真27点)にまで腫れ上がった。リオデジャネイロ大会(2016)も同様に37ページ(写真は25点)であった。

また、記事スタイルにも変化は確認できる。東京大会からアトランタ大会までは写真にタイトルを被せるスタイルのみであったが、シドニー以降、それに文章記事も付加されるようになった。東京大会当時、テキストによる記事は、写真に付される簡単な文言だけでなく、競技の全体像とその評論、あるいは個人による観戦記的なもの、さらには社会的な出来事としてのアマチュアリズムとオリンピックムーブメントに関する論評や問題提起などであった。しかし近年のグラフ誌における文言の内容を見ると、そのいずれもが選手またはチーム個人を扱ったものであり、視点自体が社会的文脈を離れ、個人・個別に分解されている。

(2) スポーツおよびアスリートへのまなざしの変化

①社会的文脈から解放されるアスリートとスポーツ

さて、以上の検討から見えてくるオリンピックへのまなざしの変化について、どのようなことが言えるであろうか。以下ではこれまでの議論を取りまとめたうえで、かつての総力戦体制を反映させたまなざしが消費的かつ個人的なものに変わりつつあることの現代的意味と今後について考えてみたい。

まず全体として見て取れる傾向は、表紙の変化にせよ、大会ハイライト記事の構成の変化にせよ、オリンピックというイベントから、社会的な文脈が欠落していく点である。表紙についていえば第1期の多様な視点の時代にあって、聖なる祭典や若人の祭典を象徴するものはもちろん、個人や個別チームを取り上げたものも一部ある種の社会的文脈を踏まえたものであると考えられる。例えばメキシコ大会のアサヒグラフにおける君原健二のゴールシーンは、後のアトランタ大会における表紙（有森裕子選手）と要素的には酷似したものとなっているが、君原選手の場合、前回の東京大会銅メダリスト円谷選手の自殺（1968年1月）との関係から、国家主義的な過度の期待による選手への圧迫が問題視される中でのリベンジというテーマを多分にはらんでいたものと考えられる。またローマ大会で100m背泳ぎに銅メダルを獲得し、前畑秀子以来二人目の水泳女子メダリストとなった田中聡子や、当時アニメーション企画とタイアップして子供たちの人気を獲得した、ミュンヘン大会の男子バレーボールチームも、ある意味では当時の「国を挙げた」期待の表れであり、ある種の社会的文脈を持ったものであったと言える。

その後国際的スター選手の活躍ぶりを表紙とした80年代の2大会以降は、社会的文脈よりも選手そのものが主題となっていく。これはとりもなおさず、オリンピックが社会的一大イベントとしての解釈からスポーツそのもののイベントとして位置付けられ、競技や選手たちもその社会的背景から自由になり競技それ自体、選手それ自体として認識されるようになったのではないだろうか。

特に日本の80年代以降のメディア文化・消費文化の興隆という文脈を踏まえた場合、それが消費的な娯楽の中で引き起ってきた点は留意すべきであろう。

②仲間化され消費されるアスリート

さらに90年代以降、テーマは日本チーム、日本人選手へと移行していく。しかしこれは実際の各大会における日本チームの成績と照らし合わせてみると、必ずしも選手の活躍度に起因するものではないことがわかる。例えば両誌の表紙が世界のスター選手から日本人選手に移行したバルセロナ大会においては、アメリカプロバスケットリーグ（NBA）のスター選手たちがドリームチームを結成し、圧倒的な強さで優勝したり、陸上男子走り幅跳びのカール・ルイス選手が同種目初の3連覇を達成するなど、世界のスター選手たちの活躍が大いに話題となっていた。一方この大会では日本ナショナルチームはわずか3つの金メダルを獲得したに過ぎない。水泳女子

200m 平泳ぎの岩崎恭子選手の活躍は当時大々的に報じられ、国内において大きな話題となったが、ロサンゼルス大会における山下選手やソウル大会における鈴木大地選手などが選ばれず、それぞれカール・ルイス、フローレンス・ジョイナーが採用されていることから考えれば、視点が変化したことが伺える。

さらに言えばバルセロナ大会の岩崎恭子選手は金メダリスト（女子競泳平泳ぎ 200m）だったが、続くアトランタ大会でアサヒ、毎日両誌の表紙を飾った有森裕子選手は銅メダリストであり、2大会連続でのメダル獲得とは言え、金メダルを獲得した柔道の 3 選手を差し置いての登場は、おそらく選定の基準が成績とは別のものに移行したことを物語る。（具体的には有森選手が当時インタビューで答えた「初めて自分をほめたいと思う」発言のインパクトの強さに由来すると思われる）

その後シドニー大会から再び日本チームの成績が向上する中、日本人金メダリストが表紙を飾るケースが目立ってくるが、それでもロンドン大会の卓球女子団体チームなど、金メダリスト以外の選手、チームも取り上げられている。

そして、このことが意味するまなざしの変化についてより顕著に示すのが大会ハイライト・名場面集の変化である。前述のように、かつて外国人スター選手を紹介していたハイライトは、現在ではそのすべてが日本選手の活躍の紹介となっている。今や彼らの活躍ぶりは写真のみならず簡単な文章表現によって味付けされ、物語化されている。そしてその物語はかつての円谷、君原両選手をめぐる、重厚で国家主義的な「大きな物語」ではなく、軽やかで消費的な「プチ物語」というべきものであろう。いわば、「日本国選手団」を国ぐるみで応援するのではなく、選手そのものを消費者個人として応援することが指向されている。

③スポーツ観戦文化の貧困化と、新たなる国家主義の可能性

しかし筆者が着目したいのは、そのようなナショナリズムの後退と消費的物語の台頭自体にあるのではない。仲間としての「チーム日本」の活躍ぶりをひたすら消費的に応援することそのものは、スポーツ観戦の 1 バリエーションにすぎず、その意味では人々の楽しみの一回路に位置づけられるにすぎないからである。

問題はむしろそのような見方、楽しみ方が他の鑑賞スタイルを駆逐し、いわば「つながり消費による植民地支配」とも言うべき現象が、オリンピック観戦というジャンルにおいて起こる可能性である。そして、現にその兆候は見えはじめていると筆者は考える。例えば、先のリオデジャネイロ大会においてもウザインボルトの陸上男子 100m 走 3 連覇をはじめ、世界的な選手たちによるハイレベルあるいはドラマチックな戦いは数多く見受けられた。その中で仲間への応援を消費的に行うことが優先し、楽しみ方と楽しみの対象の選択肢を狭いものとしてしまうことで、これらトップアスリートたちによる世界最高峰の戦いのドラマは横に追いやられてしまう。そしてこれは高校野球の甲子園大会や J リーグなどの地域密着型のプロスポーツ、相撲のような全国一

律的楽しみをメインとするスポーツなど、本来それぞれの持つ楽しみ方に多様性を持つはずのスポーツ文化の豊かさが失われてしまいかねないものと考えざるを得ない。さらに言うなら、選手をキャラ化、仲間化することで、選手そのものに対する暴力的なまなざしが形成される可能性も考慮に入れるべきであろう。すなわち青少年や子供たちの間で問題視されている、“やさしい関係”ゆえの問題に類似する現象が、アスリートと一般ファンをとりまく、コミュニケーション空間（特にメディア空間）において発生する可能性である。

そして、本稿の提示した問題圏との絡みで言えば、この傾向はさらなる難題を派生させる。それは、ポスト総力戦の現代において、前時代的の重厚長大型国家観が退却する中、新しい形でのナショナリズムを作り出していく可能性があることである。

むろんこの点については、今回紹介したグラフ誌の分析作業から直接的答えを導くことは不可能であり、次回以降の課題とするところである。そこで以下では、結語に変えて、この問題圏をめぐる若干の課題を提示しつつ、本稿のまとめとしたい。

IV 結語に変えて～消費される「仲間」が紡ぐ、新たなる「国民国家」幻想～

今回の分析から明らかにできたことは、1964年当時存在した国民に幻想されるべき「国家」というイメージが、2010年代の今日には必要とされなくなりつつあるということと、そしてその変化の道程である。

アンダーソンの言に従うのであれば⁸、1964年の東京大会はまさにこのような意味において、国民に「日本」というイメージを「共同幻想」させ、それによって国民統合を果たそうとする装置であった。では、そのような幻想の装置が今日「仲間」イメージを消費する装置に置き換わったことは何を意味するのであろうか。言い換えれば、「国民国家」にアイデンティファイすることは、意識構造としてどのように変わったのだろうか

その答えとして、国民視点から、アイデンティファイする対象が情報化の進展により拡散・多様化したと考えるのは容易いであろう。しかしその議論は、おそらく答えとしては不十分である。何故なら、国民の集合意識レベルが一つのシステムであるとするならば、当然そのパターンの変更は「環界」に位置する諸システムの変更をももたらさずである。特に「国民国家」としてのアイデンティティ意識の変容は、投票行動、消費行動、労働を通じ、「国民国家」を動かしている、政治的、経済的な諸システムのパターンの変更へと連なるはずであり、結局のところ、アイデンティティ変容の意味を探るためには、「国民国家」というシステムそのものの問題を検討する必要がある。現状で起きていることが本当に意識面における「総力戦体制」との決別であるとするならば、当然社会諸システムにおけるポスト総力戦も検討されなければならない。

今回の論考では、ポスト総力戦的なシステムと、その一端としてのアイデンティティのシステ

ムに関する議論自体は、主題としてはいない。しかし本稿で指南した、社会的事象（およびその関係者）のキャラ化、仲間化、そして消費化は、ごく一部分にせよ、その具現化の要素を持っていると筆者は考えている。

-
- ¹ 一例として、ACジャパンが提供しているTVCMが挙げられる。「2020年に向け、日本を考えよう」という中期テーマで制作されたこのシリーズでは、第1弾として「ライバルは1964年」、第2弾として「TOKYOだけじゃない」なるキャッチフレーズが世に送り出され、日本国民全体が社会を盛り上げていくようよびかけられている。
 - ² なお冬季大会については、1972年の札幌大会(第11回)の際に初めて特集号が発行されたが、その後は一担は姿を消し、長野オリンピック(1998年:第18回)、トリノオリンピック(2006年:第20回)、およびバンクーバーオリンピック(2010年:第21回)の際に発行している。日本で開かれた両大会のみならず、荒川選手が金メダルを獲得したトリノ大会や、浅田真央選手のブームが起きたバンクーバー大会においても発行されている点は特筆すべきだが、夏季大会のような継続性は存在せず、おそらく時の話題としての大きさによって発行していると見るべきであろう。
 - ³ うち72年の札幌冬季大会および、同年のミュンヘン夏季大会の毎日グラフについては非光沢タイプの紙も併用されている。その意味でも、いかに東京大会の毎日グラフが特殊であったのかがわかるだろう。
 - ⁴ 例えば以下のような記事があげられる。アサヒグラフ「憩いのひととき」3P.写真5点。毎日グラフ「世界一のサロン」3P.写真4点。ともに選手村でくつろぎ、交流する海外選手たちの様子がとらえられている。
 - ⁵ このことと関連して指摘しておきたいのは、両グラフ誌には掲載されていないものの、当時新聞社等の報道機関から発行された写真集においては、必ずと言ってよいほど東京の都市化、日本の近代化に関する記事が掲載されている点である。ここに、「世界に誇る<近代都市トウキョウ>が世界からやってきた若きスポーツマンたちを迎え入れる」と言う物語を読み取ることができる。
 - ⁶ 山之内靖2015,PP132-142
 - ⁷ 1940年の東京オリンピックが返上された経緯については、橋本一夫2014等を参照のこと
 - ⁸ 周知のように、B.アンダーソンは、「国民国家」について、近代資本主義の発展に伴い宗教的コミュニティ、王族の地域支配が崩壊する中、新たなアイデンティティの拠り所として、言わば人為的に創造されたものであると指摘した。そして、そこにおけるメディアの役割については、共同の想像を促し、「国民国家」の正当性信仰の拠り所とすることにあるとしている。詳

しくはBenedict Anderson 1983参照。

参考文献

- ・橋本一夫2014『幻の東京オリンピック 1940年大会 招致から返上まで』講談社
- ・刈谷剛彦他編2015『東京オリンピック—1960年代(ひとびとの精神史 第4巻)』岩波書店
- ・老川 慶喜2009東京オリンピックの社会経済史日本経済評論社
- ・山之内靖2015(伊豫谷登土翁、成田龍一、岩崎稔編)『総力戦体制』ちくま学芸文庫
- ・野口悠紀夫1995『1940年体制—「さらば戦時経済体制」』東洋経済新報社
- ・ケネス・ルオフ2010『紀元二千六百年～消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版社
- ・Benedict Anderson 1983 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* = 白石隆・白石さや訳『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』リブポート1987年

※その他、『アサヒグラフ』『毎日グラフ』各オリンピック特集増刊号については(ローマ、東京、メキシコ、ミュンヘン、モントリオール、ロサンゼルス、ソウル、バルセロナ、アトランタ、シドニー、アテネ、北京、ロンドン、リオデジャネイロ)を中心に分析対象とした。